

《巻頭言》

ビンディング氏、ランゲル氏講演会の経緯

日本禁煙学会理事

宮崎恭一

1. はじめに

さる6月13日(土)午後「2009世界禁煙デー記念講演会」が開催されました。テーマは「ドイツ受動喫煙防止法に学ぶ」で、講師としてドイツ連邦議会議員、ローター・ビンディング氏とドイツがん研究所がん予防・タバコ対策部長マルチナ・ペチュケ・ランゲル氏のお二人をお呼びしました。

日本禁煙学会の皆様には資金的にも、人材的にも多大なご協力をいただき心から御礼申し上げます。今回は講演会企画から、実行までのエピソードを述べます。

2. ビンディング氏との出会い

そもそもこの話は、東京衛生病院内科の佐々木温子医師から2008年10月ごろ、「ドイツで受動喫煙禁止法を立ち上げた国会議員さんがいるので、日本に招けないか」との相談を受けました。ドイツ人である佐々木医師のご主人が、その議員の奥様と同じ会社に勤めていることから話がはずみ、日本に行っても良いという感触を受けたのでした。どこか受け皿を探す必要があるということで、日本禁煙学会の評議員の私から、作田理事長に相談しましたところ、海外からのゲストを呼んでのイベントは厚生労働省などと絡めてはでどうでしょうかとの提案でした。

忘れもしない10月24日に「たばこ健康問題NGO協議会」会長の島尾忠男先生にご相談すべく、ご都合を聞くと、「ちょうどその日、荻窪の保健センターで会議があるので、その足で東京衛生病院に行ってもよいですよ」との願ってもないご返事をいただきました。佐々木医師と同席して、NGO協議会が受け皿となる可能性について伺いましたところ、「丁度来年度の世界禁煙デーのことを考えていたところ」、とのことでご賛同をいただきました。

3. 東京倶楽部からの助成のいきさつ

それに前後して、佐々木医師の同級生が社団法人東京倶楽部の理事をされていて、国際交流であれば資金が出る可能性があるとのお話が入りました。東京倶楽部は明治天皇が設立した由緒ある紳士倶楽部で大きな基金を持ち、国民運動、国際交流など多岐にわたって援助している団体です。ところが二人の推薦人が必要とのことで、お一人は林高春東京衛生病院名誉院長に禁煙専門家として推薦をお願いしましたが、もう一人は？ということになりました。東京倶楽部の会員名簿を見せていただくと、日本赤十字社の近衛忠輝社長が目飛び込んできました。日本赤十字社といえば、作田理事長が広尾の日本赤十字社医療センターに勤務されているので、早速推薦状をお願いしていただきました。近衛社長は快く推薦状を引き受けてくださっただけでなく、東京倶楽部の助成金審議会にも声をかけてくださりました。年末には助成金額も決定し、12月24日に審査委員との昼食会をかねて授与式にも参列させていただきました。

4. 主催者と会場の決定まで

ただ、どこの団体が中心になるのかという点が、まだ不確かでした。全国禁煙推進協議会の事務局局長として平間敬文会長にも相談しましたが、組織としては弱いのでやはりNGO協議会にお願いしようということになりました。しかし、NGO協議会も厚労省管轄の公益法人7団体で成り立っていますので、外部から話がきて、では受け入れましょうということにはなりません。そこで、まず2009年1月16日に健康・体力づくり事業財団が事務局をしている、健康日本21の「食と栄養」分科

会が持たれましたので、そこで最初のビンディング氏講演会のアナウンスをいたしました。2月12日には昨年度初めての「タバコ」分科会が結核予防会で開催され、約40団体が参加しました。その席でも企画書を説明させていただき、2度目のアナウンスとなりました。

3月1日には日本禁煙学会の総会が日本赤十字社医療センターで開催され、私も理事に推薦されるという慌ただしい中で、日本禁煙学会として主催をすることが決議されました。これを受けて、4月3日の第2回「タバコ」分科会にて、正式に健康日本21のタバコ分科会行事としても承認されました。会場は当初、第2回総会を行った、国立がんセンターの会議室を金子理事にお願いして予約を入れていたのですが、日本医師会の内田常任理事から日本医師会大講堂も可能性があるとのことご提案をいただきました。早速3月30日に結核予防会の山下武子事業部長らとお伺いし、正式に大講堂使用の許可をいただくことができました。

5. ランゲル氏招聘のいきさつ

すべてが整い、第1回ビンディング氏講演会実行委員会が開催され、細部の詰めが始まりました。予算の関係で、ビンディング氏お一人をお呼びする予定でしたが、日本のドイツ大使館とも連絡が取れ、その結果ビンディング氏の交通費については、ドイツSPD党からの特別援助が適用されるようになり、宿泊費以外はすべてドイツ側でお払いしていただくことになりました。そこで2003年にヘルシンキで行われた第12回タバコか健康か世界会議で、アメリカアドボカシー財団の研修を我々(望月先生、宮崎)とともに受けた、マルチナ・ベチュケ・ランゲル医師もぜひお呼びしたいということになりました。

後で判明したのですが、彼女の研究がビンディング氏の政治家としての良心を刺激し、受動喫煙の危険性を印象付けたのでした。彼女は望月友美子先生ともWHOコラボレーションセンターの関係で交流もあり、強力な推薦もしていただきました。その結果、なんと旅費もドイツがん研究所が提供するとの連絡が入ったのです。私どもスタッフは本当に驚きとともに、ドイツの政策力、行動力に感動いたしました。

6. 来日後の活動について

せっかくドイツからいらしてくださった政治家と研究者ですので、なんとか日本の政治家と交流していただきたいと、駆けずり回ったのですが、新型インフルエンザと都議選などが災いして、多くの方がたは集めることができませんでした。しかし、厚生労働省の国際課長とのブリーフィング、小宮山衆議院議員のお計らいで、江田五月参議院議長との面談、禁煙議員連盟の綿貫会長以下幹事の皆様との交流ができ、すばらしい時を過ごすことができました。

ぎりぎりになって、問題は大会場をうずめることができるかということになりました。医師会では公衆衛生部会担当の先生方を招待するという方針をとっていただきました。また結核予防会でも関係団体に強く呼びかけました。渡辺文学さんにも協力していただき、マスコミにも呼び掛けました。「タバコ」分科会の各団体にも呼び掛け、5月末現在まで80名あまりの申込みが、最後の2週間で300名を超えたのです。最終人数は343名という大きな集団になりました。登録していないスタッフや展示をしてくださった各団体・企業の皆様も含めると360名近くになったのではと思われます。

講演の内容は後日、小冊子にして総会等でお配りしたいと考えております。また、後半にはシンポジウムが計画され、小宮山洋子議員、内田健夫常任理事、関口正俊神奈川県議員がすばらしい発表をしてくださいました。各セクションの座長を務めてくださった先生方も適切なお発言をされ、みごとなまでの講演会、シンポジウムになりました。特に講演の通訳をしてくださったお二人の同時通訳者の活躍も忘れてはなりません。とてもわかりやすく、まるで日本語の講演を聞いているかのような感じでした。

7. おわりに

最後の追い込みで、能力を120%以上発揮していただいた結核予防会のスタッフの方々、また会場周りをビシッと決めてくださった日本医師会のスタッフの方々、そして日本禁煙学会の皆様、全国禁煙推進協議会の皆様、日本禁煙推進医師歯科医師連盟の皆様には心から御礼申し上げます。



「2009世界禁煙デー記念講演会」で講演中のドイツ連邦議会議員、ローター・ビンディング氏(左)とドイツがん研究所がん予防・タバコ対策部長マルチナ・ベチュケ・ランゲル氏(右)